「まことの礼拝を打ち建てる主」

マタイによる福音書１４章２７－３３節

森島 牧人 牧師

先回私たちはマタイ１４章を読みながら、どのようにしたら信仰生活を続けることが出来るのかを考え、その答えを確認しました。それは、主イエスの「わたしのところへ来なさい」という言葉を聞くことによってであり、もし主のその言葉がなければ私たちの信仰生活は成り立たないというものでした。さらに、この主イエスの言葉を私たちはバプテスマという信仰生活のスタート時点で聞き、新しい人生へ踏み出したのだったこと、そしてそれを聞くのはバプテスマの時だけではなく、その後も礼拝の度毎に聞き、新しい週への力と勇気を与えられて生きて来たのだったということでした。

さて、先回も学んだのですが、今日の聖書箇所には、主イエスの「来なさい」との言葉に従って水の上に踏み出したペトロが、不思議なことに沈むことなく湖上を歩いたと記されています。寸前まで彼を不安に陥れていた荒れ狂う嵐への恐怖は、湖上の彼の足元、すなわち彼のコントロール下にありました。つまり、主の言葉を聞きそれを信じて踏み出した時、彼ははそれまで自分を苦しめていたもの全てを乗り越えて生きていたのです。

ところが残念なことに、このペトロの歩みは長続きしませんでした。聖書には「しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、『主よ、助けてください』と叫んだ。」（マタイ１４：３０）とあります。主の言葉だけを聞いていれば良かったものを、嵐に目を向けた瞬間、彼の足は沈み始めたのです。これは私たちがよく経験することです。主イエスの声に従って踏み出したはずが、眼前にある難題に混乱して主の声を離れ、その結果沈んでしまうという状況です。

溺れそうになったペトロは、「主よ、助けてください」と叫びます。聖書には「イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』と言われた。そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。」（同１４：３１－３２）と記されています。

ここで私たちが気付かされる重要な点は、主がペトロに言われた言葉が「信仰の＜薄い者よ＞」であり、「信仰の＜無い者よ＞」ではないということです。「小さくとも信仰はある」と言われている、それは偏に、ペトロが「主よ、助けてください」と叫んだからです。「信仰の小さい者よ」と幾度も主に言われている私たちですが、沈みそうになるその度に私たちも主に向かって叫ぶのです。その度に主は、「お前の信仰は小さいなあ」とおっしゃりながら私たちを助けてくださるのです。

ここに確かなことが一つあります。私たちは水に沈む弱い者ですが、主イエスは水に沈むことなく立っておられるのです。何故なら、この方は神だからです。その神ご自身が私たちに命を与えるために地上に降り、十字架上で肉を裂き血を流してくださったのです。そしてその方は今も、人生の嵐の中で進めないでいる私たちに近付き手を伸べて助けてくださるのです。まさにアドベントの神・インマヌエルの神です。

アドベントの神・インマヌエルの神の言葉に従って、私たちが新しい一歩を踏み出す時に大切なのは、もちろん私たちの決断です。でも、ここで私たちが忘れてはならない大切な事は、私たちが決断するよりずっと前に、既に父なる神が、そして主イエスご自身が、私たちには測り知れない決断をしてくださっていたということです。それは、罪人である私たち人間を救うため、神ご自身が十字架に架かるために＜人＞となり、この地上にお生まれになるという決断でした。この決断によって、主イエスは私たちを愛し救うために、家畜小屋に生まれてくださったのです。

まさにこのことが暗闇に輝く＜まことの光＞であり、この光の中にこそ希望・平安・喜びがあります。このイエス・キリストの出来事にこそ価値があることを確認し、それを祝うために、私たちは主に導かれて毎週毎週教会に集まり、＜まことの礼拝＞を捧げているのです。

（説教要約　羽入田悦子）